

方形器物ヲ鑄ルノ法ヲ習得セシム

右ノ法ヲ習得シタル後各自ノ意匠ヲ用テ器物ヲ新作セシム

第三年

方形生底花瓶

兔置物

岩上観音置物

器物動物人物佛像等〔まるがき〕全鑄ノ法ヲ習得セシメ及ヒ此法ヲ應用シ

各自ノ意匠ヲ用テ丸物ヲ新作セシム

### 鍛 金 科

鍛金科は明治二十八年九月に開設され、囑託教師桜井正次、平田宗幸が指導にあたった。前記の「第一回生徒成績物展覧会出品目録稿」は同科が開設される前に作成されたもので、同科については次の記述があるのみであって、教程は把握できない。

#### 鍛金標本目録

- 無紋銅器 一個
- 唐花彫銅器 一個
- 靈芝鈕鉄香炉 一個
- 鍛金順序 七個
- 鍛金道具 一式

#### 鍛金標本説明

金属ヲ鍛鍊シテ之ヲ打出シ諸種ノ器物ヲ作ルノ順序ヲ示スモノナリ

第一 地金

第二 地金ヲ切りタル処

第三 打始メ法

第四 打出シ法（其一）

第五 同 （其二）

第六 形ヲ取り始ムル処（其一）

第七 同 （其二）

第八 前方法ニ依リ打上ケタルモノニテ素銅色ヲ付ケタルモノナリ

第九 前ニ全シク彫刻ヲ施シ火色ヲ付ケタルモノナリ

第十 前ニ全シク鉄ヲ用キテ新案シ彫刻ヲ施シテ後鑄（せ）ヲ付ケタルモノナリ

ただし、本学芸術資料館所蔵の手板（毛彫、鋤彫、打出等の手本）や器物の手本によって教程の一部を知ることができる。

### 漆 工 科

岡倉寛三は漆工教育の開始にあたって教師の人選に苦慮した様子である。例えば次のような話も伝わっている。

……東京美術學校に漆工科をおかるゝや、時の學長岡倉寛三氏人を介して泰眞を招かれしも、かたく辭してつかず、余は一箇の蒔繪師のみ、いかでか人に授くる才學あらん、又これを教ふる術を知らず、さりながら余の業を職として學ばんとする者は余が工場に入るを拒まずと。岡倉氏これをきよてしふること

能はざりき。

(横井時冬著『日本工業史』昭和四年二月。改造社)

ときに蒔絵の大家柴田是真(文化四年〜明治二十四年)は既に高齢で、是真に次ぐ大家と言われたのが池田泰真(文政八年〜明治三十六年)であったが、岡倉はその起用に失敗した。

本校の漆工教育の最初の指導者となったのは小川松民であった。

松民は名工中山胡民の門人で、師風をよく伝え、また、古典蒔絵の研究にも努めた人で、本校の漆工教育が始まる三ヶ月前に採用され、授業方法の考案、手本(手板)の製作等々、授業の準備に尽くした。徒弟制度のもとで師資相承されてきた漆工技法を、学校教育の中の一教科として編成することに大変苦心したといわれる。この松民はしかし、明治二十四年に死去し、後任に蒔絵の名人白山松哉が起用され、さらに、伊東乾谷、金井清吉が採用された。同二十五年十一月に至り、漆工科は蒔絵科と改称(同二十九年七月に再び漆工科と改称)。同二十六年、松哉辞任。後任に幸阿弥派の伝統的技法の正統を伝える川之辺一朝が起用され、また、伊東乾谷が辞任し、鞘塗りの名人橋本市蔵(二代目)が調塗授業担当として採用された。

漆工の実習科目には「工場実習」、「調漆法」、「図案」があり、中心となるのは「工場実習」で、手本に基づいて段階的に技法を習得させた。その教程に該当するのが、「第一回生徒成績物展覧会出品目録稿」(前出)中の左の記述であり、これと、本学芸術資料館所蔵の蒔絵手本および習作等によって、教育内容の凡そを把握することができる。

### 蒔絵標本目録

笹線書順序	三枚
松線書	一枚
波紋付書	一枚
梅平蒔繪順序	六枚
鳥模様平研出蒔繪順序	八枚
團扇高蒔繪順序	十枚
平目地	一枚
水草濃淡入研出物	一枚
芦ニ鷺研出平蒔繪混合製作	一枚
月ニ烏瓜研出高蒔繪混合製作	一枚
蝶鳥色高蒔繪	一枚
朱色花丸高蒔繪	一枚
蓮ニ燕墨繪物	一枚
月ニ葛研出黒蒔繪混合製作	一枚
扇面ニ夕顔	三枚
水仙木地蒔繪	二枚
柿鏝上高蒔繪順序	四枚
流水肉合研出高蒔繪	六枚
菊桐高蒔繪	一枚
雀方盆	一個
薄ニ葛模様棗	一個
菊模様小箱	一個
波ニ鶴高蒔繪	九枚

流水ニ夕顔——蒔繪

八枚

桔梗折枝——蒔繪

二枚

蒔繪用具

一式

### 蒔繪標本説明

三年ヲ以テ蒔繪ノ法ヲ習得セシメンカ為ニ設ケタルモノナリ  
而シテ逐年ノ順序ヲ示セハ左ノ如シ

上等製標本ノ部

### 第一年標本

### 第一 笹

可成長キ線書ノ標本ヲ与ヘテ筆ノ使用法ヲ練熟セシム

(1)ハ漆ニテ画キタルモノナリ (2)ハ其畫キタル上ニ金粉ヲ  
蒔キ附ケタルモノ (3)ハ之ヲ研キテ仕上ケタルヲ示ス

### 第二 松

細線ノ集合ヲ熟練セシムル為ノ標本ナリ

此仕上方ハ笹ノ仕上法ト同シ

### 第三 波紋

曲線ヲ熟練セシムル為メニ与フル標本ナリ

此製作及仕上方前同様

### 第四 梅

平蒔繪ノ製作法ヲ示ス

(1)上絵下入ト称シ凡テ画紋ノ重ナリ処等ノ書キ割り場所ヲ  
ノ地色ノ顯出ヲ拒ク為メニ金ノ細粉ヲ蒔キ付ケタルモノナ  
リ (2)花ヲ漆ニテ画キタル処 (3)ハ漆書キノ上ニ朱ヲ蒔キ  
付ケタル処 (4)ハ枝ノ村取 (不明) ケ所ニ金粉ヲ散附セシ処

(5)ハ前同様枝ノ残りシケ所ニ青金ヲ散附セシ処 (6)ハ凡テ

ヲ書キ終リ之ヲ研キ花藥ヲモ画キ再ヒ磨キ終リタルモノ  
(但シ如此凡テ研磨スルニハ木炭ヲ以テスルモノナリ)

### 第五 鳥模様

研キ出蒔繪ノ法ヲ示セルモノナリ

(1)模様ニ金粉ヲ蒔キ付ケシ処ヲ示ス (2)地ニ荒金粉ヲ蒔キ  
付ケタルモノ (3)全体ヲ黒漆ニテ塗込タルモノ (4)塗リタ  
ル上ヲ有増シ研キタルモノ (5)右研キタルモノヲ再ヒ薄ク  
塗リタルモノ (6)再ヒ丁寧ニ研キ凡テ画面ヲ顯出セシメタ  
ルモノ (7)色上ヲナス為ニ生漆ヲふき付ケタルモノ (8)磨  
キ上ケタルモノ

### 第六 團扇

高蒔繪ノ順序ヲ示ス

(1)漆ニテ塗リカケタルモノ (2)右塗り終リタル上ニ木炭ノ  
粉ヲ蒔付ケタルモノ (3)右ノ上ニ薄ク漆ヲ塗付ケセシモノ  
(4)右ノ上ヲ平滑ニ研キタルモノ (5)右ノ上ヲ漆ニテ稍厚ク  
画キタルモノ (6)右ヲ研キ平坦ナラシメタルモノ (7)其上  
ニ荒キ金粉ヲ蒔キタルモノ (8)右ノ上ヲ薄ク塗リタルモノ  
(9)塗リタルモノヲ研キテ金粉ヲ出セシモノ (10)右研キ終タ  
ル後凡テノ模様等ヲ画キ終リ磨キ上ケタルモノ

### 第七 平目地

置平目及蒔平目ヲ示セルモノナリ

平目トハ粉ノ名称ナリ此中尤モ荒クノ粒々ノ判然タル部ハ  
一粒ツ、並ヘ置キシモノナリ之ヲ置平目ト称ス 他ノ二ケ

所ハ散附セシモノナリ之ヲ蒔平目ト称ス

### 第八 水草

濃淡入研出ニノ製作順ハ前研出ト同シ

#### 第二年

##### 第一 芦ニ鷺

研出及平蒔絵ヲ混合シテ製作セルモノナリ

##### 第二 月ニ烏瓜

研出ト高蒔繪混合製作法ヲ示ス

##### 第三 蝶鳥

色漆ヲ使用セル蒔繪ノ法ヲ示ス

##### 第四 朱地花丸

平目入朱地ニ高蒔繪ヲ施セルモノ也

##### 第五 蓮ニ燕

墨画ノ製作ヲ示ス

##### 第六 月ニ葛

月ハ研出ニシテ葛ハ黒蒔繪即黒漆高蒔繪ナリ

##### 第七 扇面ニ夕顔

(1) 扇面ノ線書ヲ為シ其地ニ青金梨子地粉ヲ散附セルモノ

(2) 右ノ上ヲ梨子地漆ニテ塗り而后チニ其上ヲ平滑ニ研キタルモノ

(3) 右研キ終リ其光沢ヲ発セシメテ后チ高蒔繪ニテ

画紋ヲ画クモノ

#### 第三年

##### 第一 水仙

(1) 木地ノ汚ル、ヲ防カン為メ錫金具ヲ張り画紋ヲ切抜キタ

ル処 (2) 右切りタル処ニ高蒔繪ヲナシ其終リタル後金具ヲ剝キ取りタル処

#### 第二 柿

さび上高蒔繪ノ順序ヲ示ス

(1) 輪劃ヲ畫キタル処 (2) さびヲ塗付ケン処 (3) さび塗ノ上

ヲ研キ其上ニ塗漆シテ研キタルモノ (4) 右研キタル後通常

ノ高蒔繪順序ニヨリ葉及柿ノ実ヲ画キタルモノ

#### 第三 流水

肉合ヲ保テル研出法ヲ示ス

(1) 肉下ヲ蒔キタルモノ (2) 右ノ上ニさびヲ付ケンモノ (3)

右ノ上ヲ塗漆セシモノ (4) 切金ヲ置キシモノ (但一ヶ毎ニ

置キタルモノ也) (5) 其上ニ金粉ヲ蒔キカケタル処 (6) 右

ヲ塗込普通ノ研出法ニヨリ研出シ其後さび上高蒔繪ノ順序

ニヨリ岩ヲ画キ終リシモノ

#### 第四 菊桐紋様

普通ノ高蒔繪ナレモ製作ニ甚タ困難ナルヲ以テ最終ノ標本ト

セリ

#### 方盆 老個

第一年ノ順序ヲ経テ作りタル器物ノ成績ヲ示ス

#### 棗 一個

二年ノ順序ヲ経テ作りタル器物ノ成績ヲ示ス

#### 菊小箱

第三年ノ順序ヲ経テ成レル器物ノ成績ヲ示ス

下等製標本ノ部

此標本ハ普通下等品製作法ノ順序ヲ示セルモノニソ一見正當ノ蒔繪ノ如クナレモ子細ニ之ヲ見分クルルハ其法ノ簡短ナルト粗末ナルニ驚カザルヲ得ス

### 第一 波ニ雀

之ヲ下等品中ニ於ケル上製高蒔繪ノ法トス

### 第二 流水ニ夕顔

是亦下等品中ニテ上位ニアルモノナレモ流水ノ金銀粉ノ如キモ錫、銅、真鍮等ヲ用ヒ上画ノ粉ノ如キモ上等製蒔繪ニ用フルモノハ凡テ球状ヲ為シ居レモ之等ハ皆扁平ナルモノナリ

### 第三 きゝやう折枝

之レ尤モ下等品ニソ一夜ノ内ニ製作シ得ルモノナリ其光沢ノ如キモ敢テ研磨ノ功ヲ費ヤサズ

### 蒔繪標本保存法

標本ニ塵埃ノ積リタルトキハ毛箒ヲ以テ之ヲ掃ヒ去ルヘシ又標本ノ面ニ手ニテ持チタル跡ノ付キタル若クハ曇リヲ生シタルトキハ至テ柔カク製シタル鹿皮(即チナメシ皮)ヲ以テ之ヲ拭ハ、何年ヲ経ルモ新製品ノ如ク見ユルナリ

〔彫金科以下は第四年の教程について記していないが、それは第四年が新案ないしは卒業製作を専らとしたためである。〕

なお、ほかに関連資料として武谷富造(号松泉。明治二十七年二月蒔繪科卒業)の遺稿「宇留志繪の志るべ」に伊東乾谷の教授項目を記録した箇所がある。乾谷が果たしてどの程度それを教授したかは不明だが、乾漆技法に重点を置き、しかも器物ではなく、乾漆による

大作人物像の製作で教程を完結させており、その点に草創期における漆工科の理想の一端が窺われて興味深い。

伊東技手東京美術学校ニテ教授課目左ノ如シ

### ○第一年度

#### 第一ヶ月

漆工開祖淵源ノ大畧講議

漆液産地ノ始メ漸次ニ産出シタル有名ノ箇処講議

漆樹培養法并搔取法等ノ講議

漆液原料ノ試験法実示

漆商秘法ノ製法実示

漆器古有最上製法并調漆法板面ニ付宗示

#### 第二ヶ月

普通漆器上製法。方型実品ニ就テ実示

方形并盆様ノ物ヲ以テ実示

円型品并碗様ノ物ヲ以テ実行ス

#### 第三ヶ月

方円合口物種類製法実示

#### 第四ヶ月

一般ノ上塗法并ニ各色漆調漆法実示

#### 第五ヶ月

一年度第一自按 普通体骨ヲ使用シ製スル漆器自按製作

#### 第六ヶ月

一般ノ替塗并ニ調漆法実示  
第七ヶ月

各地方漆器優等品製法実示  
以下種類ノ講議

第八ヶ月

形物張拔漆器一般ノ製法

第九ヶ月

茶道具漆工名家秀次、藤重、宗哲、青海、一閑ノ漆器製作実示

示

第十ヶ月

一年度第二自按 張拔漆器替塗等ニ付テ自按製作

第二年度

第一ヶ月

乾漆小器物造型各種実示

第二ヶ月

螺蚶各種応用漆器製法実示

第三ヶ月

漆器物上代時代及当代迄別講議

唐物漆器堆朱堆黒桂漿存星具輪金馬等ノ各種製法実示

第四ヶ月

唐物漆器九連糸沈金箔絵密蛇絵紅花緑葉等ノ製法実示

第五ヶ月

二年度第一次按<sup>マ</sup> 唐物種類ニ就テ自按ノ製作

第六ヶ月

乾漆器大器物額面板大花瓶等造型法実示  
第七ヶ月

乾漆半肉彫刻花鳥類製法実示

第八ヶ月

乾漆彫刻物各着色法実示

第九ヶ月

乾漆半肉彫刻人物類各種製作法実示

第十ヶ月

二年度第二自按

三年度課目

第一ヶ月

乾漆面類各種製法実示

第二ヶ月

乾漆人物全型ノ首部製作実示

第三ヶ月

乾漆人物全型半身像製作実示

第四ヶ月

三年度第一自按 乾漆動物類全型製作実示

第五ヶ月

乾漆全型ノ半身物自按製作

第六七ヶ月

乾漆全型人像大作物製法実示

第八九ヶ月

三年度第二自按 乾漆大作物ニ依テ卒業製作ノ実行

草創期の漆工科については、同科の第一回卒業生であり、また、のちに同科の指導者となる六角紫水が回顧談を遺しているので、参考のために掲げる。

〔明治二十三年九月〕 之で本科には、繪画、彫刻、漆工、金工、鑄造〔鑄造科設置は明治二十五年〕が出来たわけであるが、自分が何を選んだらいいかが分らなくて、私もその一人であるが、やっぱり何科を選んだらよいか分らなかつたので、横山〔大観〕君とは前から懇意になつてゐたので、「どれにしたらよからうか」と金工の狩野夏雄先生に伺つて、金屬彫刻の説明を聞いたたり、小川松眠先生に漆の説明をきいたりした。横山君は家が東京にあつたが、私は、小學校の教員をやめて、どうして食べて行こうかと云ふ程貧乏であつたから、何日止める様になるか解らないので、この本科になる時には本當に困つた。

小川先生に聞くと、是非漆に入れと仰言る。途中でやめるなど云ふ事はさせないから、何とか方法をつけてやるから又卒業して、食ふに困る様な事は決してないから、責任をもつから漆に入れと、とても親切に仰言つて下さる。私は特に漆に興味を持つたわけでもなかつたが、先生がそう仰言つて下さるし、又その時には漆工の生徒が一人もゐなかつたのでそれではやつてみませう位のつもりで入つたものであつた。先生は私が入つてからも、とても親切にして下さつて、道具なども一つも買はずに皆貸して下さつた。

そのうちに、教育博物館が全部ひき拂つた。それで階上が繪

画室、階下が彫刻事務室、となつたが、工藝の方にはそういう所がなかつた。今の丁度鍛金科のある所に、長屋があつた。その中を仕切つて、漆工と金工と彫塑の教室に別けた。

第一回の生徒としては工藝科としては、漆工に私が一人居るきりで、金工にも、彫塑にも一人もゐなかつた。十五人のうち二人だけ彫刻に行つただけで、あとの人達はみな日本画に入つたのであつた。

私が漆工に入つて半年程たつと、小川先生が、お亡くなりになつた。あんなに親切にして下さつた先生が亡くなつては今後どうなるか分らないし、今の中に止めてしまおうと思つた。すると、私が止めると云つてるそうだが、そのまゝ漆をつゞける方が、地下で先生がどんなにお喜びになるか分らないから止めないでやれと、この道で立つた方が先生の遺志を生かすと、私も止めないでつゞける決心をした。

さうしてゐるうちに、一緒に入學した連中が滿二ヶ年の豫備を終えて入つて來た。

漆工の方へは新しく四人入つて來た（小川先生はこの時亡くなつたのである）私の二學期はこの人達の一學期と云ふわけである。

小川さんが亡くなる二ヶ月程前に、シカゴの博覽會へ出品するために、森村市左衛門氏から書棚を學校に頼んで來た。その圖案をしたり、木地を拵えたりするために（白山松哉先生が頼まれて來てゐたが）其の間がひまだつたので、其の間に學校の手本を作る事になつた。小川先生が白山先生に頼んだのであ

る。

その清書を私にさせたので、學校の手本が少しづつ殖えて来た。

白山先生が小川先生の亡くなられた後、正式に漆工の助教授になつて、教へてくれたが、私によく教へてくれて、他の四人に對する態度がひどくて、自分は氣の毒で、みて居れなかつた。自分でも苦しい位であつた。

三年目に卒業製作をする時に、私はこう考へた。學校に残して置く事になるのだから、學校に居る間に、是だけの事を覺えたと云ふ事が分る様に卒業製作をしなければならぬ。

初めに小川先生、中頃に白山先生、後に金井「清吉」先生に教はつたのだから、そして小川先生は光淋風ヒツメの仕事をなさる方、白山先生は、寫生風の細い仕事をなさる方、金井先生は徳川末期の岸川派の流儀を傳えてゐる方、その三人に就いて教はつたのであるから、三年間にどれだけの腕が出来たかを、卒業製作の上に、表現したいとこう考へた。

その頃、今泉雄作先生が圖案を教へてゐた、私は今泉先生の講義に圖案家として感服して居た。そして私は、卒業製作には、小さな香棚を作つた。それは間口二尺二・三寸ばかりの小さな棚である。その棚に三人の先生に教はつた技術を生かそうと、それを示す心組みで組立てたのであつた。その圖柄は武藏野の景で、空に月があつて雲がある、扉を開くと外には古今集の和歌を入れた。

扉の中側には、全部武藏野の秋草を描いた。(上の句だけ文

字で書いた様に思ふ)

それだけの圖柄を光淋風ヒツメにしたり、寫生風にしたり、岸川流にするわけにも行かんし、困つたが表を光淋風ヒツメにして、下の棚の中を金井先生に教はつた技術を使つた。

金物は川の流れ(水)にして、透し彫りにして、悉く異なる模様を圖案した。

又そうすると寫生風の技術も使はなくてはならないので、別に香合を作つた。

此の香合は中は、内部と、底裏は、置刑部梨地、甲表は松島と瀟の様な渦巻きがぶつかつてゐる様な、非常に細かい、難かしいものであつた。

白山先生の技術にも迫らう位のつもりで、一生懸命作つたものであつた。

この香合は、後に、先の皇太后様が大變に漆器をお好み遊ばされたお方であつたので、この香合を献納した。

又、書棚の方は、牧野伯がイタリヤの公使をして居られた時に、公使館の裝飾に持つて行かれたが、おやめになつてから後どうなつたか分らない。

この卒業製作の點は滿點で、漆工は私一人ではあつたが、非常に賞められた事であつた。

〔紫水自叙伝(其の五)〕『日本漆工』第二十一号。

昭和二十六年一月)